

編集を終えて

80年史製作のため与えられた期間は3年間である。決して短い期間ではなかったが、資料編の最終調整等に手間どり、結局は記念式典ぎりぎりの刊行となってしまった。

編集の基本方針として、対象期間を工学会創立の1879（明治12）年から1993年度までとすること、80年間の流れを把握しうよう総論を設けること、学会創立の背景と経緯を明確にすること、学会史のもつ固いイメージを和らげる工夫をすること、頁数の節約を図るため表を多用すること、などを決めた。さらに膨大な内容のため70年略史に最近10年分を追加する形をとるが、時間の許す限り原資料にあたるのが申し合わされている。とくに、いま調べておかないと永遠に分からないまま終わると思われる戦中戦後の一時期は、諸先輩へのヒアリングを含め調査に1年近くを費やした。幸いにいくつかの新事実を発見したものの依然として不明な点も多い。これらが次回の100年史までに解明されることを期待している。

原資料の大半は学会誌記事によった。戦中戦後の情報不足時代を過ぎ経済成長から安定期に入る60周年から80周年にかけての20年間の学会活動は目ざましい膨張を続けた。管理しきれないままに多様な情報が氾濫し記録の確実性・連続性を失い総会記録など記述の極端な簡略化、欠落などを生んでいる。途切れがちの情報をいかに繋ぎ合わせるか、作業が中断する場面がしばしばであった。貴重な写真類の紛失も少なくない。「第5編 委員会」「第7編第2章 国際交流」などは最後まで編集に悩み抜いた項目であり、不十分のままに、かろうじて取りまとめたというのが実感である。「第6編 支部」についても同様なことがいえる。当初は各支部ごとに80年間の略史を作成し、それを解説する形にしたいという編集委員会の意図はかなわず、各支部まちまちで整合性に欠ける記述となった。執筆者各位の努力に感謝するが、地方の時代である以上、次回までには一貫した支部史がまとまることを念願している。なお、第9編の年表に支部欄を新設し、編集委員会が把握し得た範囲内の情報だけは記入した。

苦しんだ編集の過程でも新しい発見という喜びがある。長い間広く使われている「土木学会誌」の文字の揮毫者の発見、20周年時に作られたバッジ原作者の経歴解明など今回の調査の大きな成果と思う。「第2編」に述べた第三高等学校・第五高等学校工学部と工学得業士、明治16年の東京専門学校（現早稲田大学）の土木科募集広告の発見、「第3編」の海軍解体と建設省との関係、「第4編」の建設ニュースの存在や土木賞牌の作者の経歴、「第6編」の華北支部や建設総署、満州土木学会の創立経緯や満州国の行政組織などが明らかにできたのは大きな収穫であった。

当初の編集方針の中に、学会誌のもつ固いイメージを破る編集という重い課題がある。80周年記念出版物すべてが独立採算という建て前である以上、本書だけが採算を度外視する訳にはいかない。正史を補完するコラム欄を設け、会員の個人情報、時代ごとのトピックスを入れ、少しでも親しみ易い内容とすることを試みた。この種の出版物としては新しい発想ではないかと自負している。全編70余編にわたるコラムのすべてが適切な題材とはいえないが、参考として楽しんでいただければ幸いである。また「第8編」に取り上げた42編にわたる思い出、随想類は、学会活動がいかにかに多くの方々の力に支えられてきたかを示す一例として収録した。

以下、『土木学会の80年』の編集に携わった経験を通して感じたことを述べておく。

まず第一に正確な資料の保存とデータベース化を挙げたい。学会活動の中心が委員会にあるとすれば、年1回それも一委員会数行たらずの総会報告は余りにもお粗末ではないだろうか。学会誌が年1回または2年に1回、数十頁の誌面を学会活動の“回顧と展望”に割けば、相互の情報も分かり問題は解決する。また、支部活動や国際交流の実情も正確に記録され情報の欠落を防ぐことができよう。

次に技術の空白時代と見られる戦時下における土木技術者の活躍状況の詳細な調査を提案したい。奇跡といわれた我が国の戦後復興の原動力となった技術への正当な評価である。戦争の非は当然としても中国東北部にほとんど無傷で残された良質な社会資本の数々と、悪条件の中で計画を推進した技術者の個人業績は、民間技術者の活躍とともに技術史の中にはっきり刻み込んでおくべき重大な事実であろう。戦後すでに半世紀、個々の情報を集積するため時期を逸してはならず土木史研究委員会の調査に期待したい。

さらに従来、土木は個人の業績を表に出すことに消極的であったが、土木広報の一助としても今後は個人を売り込むことに力を入れてほしい。それには個人情報の積極的な集約を図る必要がある。学会誌の特集“土木と100人”“続土木と100人”をベースに良質な人名事典の編集を関連学協会の協力を得て完成させることができないものだろうか。これら個人情報の蓄積は、土木技術者と社会との接点として生かされるに違いない。2000年までに川崎市へ建設が予定されている土木資料館には、当然ながらこの種の資料が収集・保管・展示されることを考えると、早急に着手すべき課題であろう。

80年分とはいえ、長過ぎた編集後記になってしまった。新しい展望を開くには過去の回顧と評価は欠かせない。本書が次の時代へ繋がる便覧として会員はもとより事務局職員をも含めた活用が図られることを心から念願している。

本書の編集にあたり力を貸して下さった諸先輩、各委員会の幹事および支部関係者、事務局職員などの暖かいご支援に深い謝意を表して筆をおく。

(土木学会80年史編集委員会委員 岡本義喬)